

巻頭写真 中国内蒙古自治区東部のハリゲヤキ群落

Hemiptelea davidii stand in the eastern part of Inner Mongolia, northeastern China

ハリゲヤキ *Hemiptelea davidii* (Hance) Planch. は中国中部（広西自治区北部以北）から中国東北部、朝鮮半島にかけて分布するニレ科の1属1種の落葉小高木である。ハリゲヤキ属は日本の更新統やヨーロッパの新第三系から果実や葉、材化石の記録があり、日本から産出する果実や材化石は、現生種とは形態が少し異なることから化石種ヒメハリゲヤキ *Hemiptelea mikii* Minaki として記載された（Minaki *et al.*, 1988）。ヒメハリゲヤキは更新世の温暖期の地層から産出するが、東京都中野区北江古田遺跡の約50,000年前の産出例を最後に日本から消滅した。

今回、中国内蒙古自治区東部、科左后旗查日蘇地区に泥炭層の調査に訪れた際に、ハリゲヤキの群落を見ることができた。この地域では、年平均降水量は約500 mmと比較的乾燥しているうえに人為的な植生破壊の結果、ところどころで裸地化が進み、風によって浸食され運搬された砂が再堆積して砂丘を形成している。そのような砂丘の斜面にハリゲヤキだけが数10本集まって群落を作っていた（写真1）。樹高は約3 mで草本層にはイネ科やアカザ科の草本がまばらに生えていた。この周辺の本木群落はというと、他には河川沿いに自生するヤナギ属やアキニレ *Ulmus parvifolia* Jacq. の群落か、ハコヤナギ属 *Populus simonii* Carr. の植林しかないが、ハリゲヤキはもっとも裸地化が進んだ場所にも生育していた。同じ砂丘に生育していたアキニレは砂に埋積すると手も足も出ないようであったが、ハリゲヤキは砂に埋もれてもルートサッカーを旺盛に伸ばし、砂の間からさかんに萌芽していた（写真2）。ハリゲヤキの茎には長さ10~15 cmの硬くて太い、先端の鋭くとがった刺が並び（写真1）、標本をとるのがひと苦労である。この刺のために、家畜による被食を免れて群落を拡大することができたのだろう。

文 献

Minaki, M., Noshiro, S. & Suzuki, M. 1988. *Hemiptelea mikii* sp. nov. (Ulmaceae), fossil fruits and woods from the Pleistocene of Central Japan. Botanical Magazine Tokyo 101: 337-351.

（百原 新 Arata Momohara）

